

広報 もり 中部の森林

私の森語り「信州の豊かな自然を描く」
透明水彩画家 清水 恵

写真：湿原の散策者を出迎えるカツラ門（飛騨署管内）

特集

- ・各地の新しい公共木造建築物の紹介
- ・実務研修による民有林支援

シリーズ

- ・現場最前線からの便り、私の森語り、中部の保護林、秘蔵写真・今は昔の林業



林野庁中部森林管理局



2025/No.255

各地の新しい

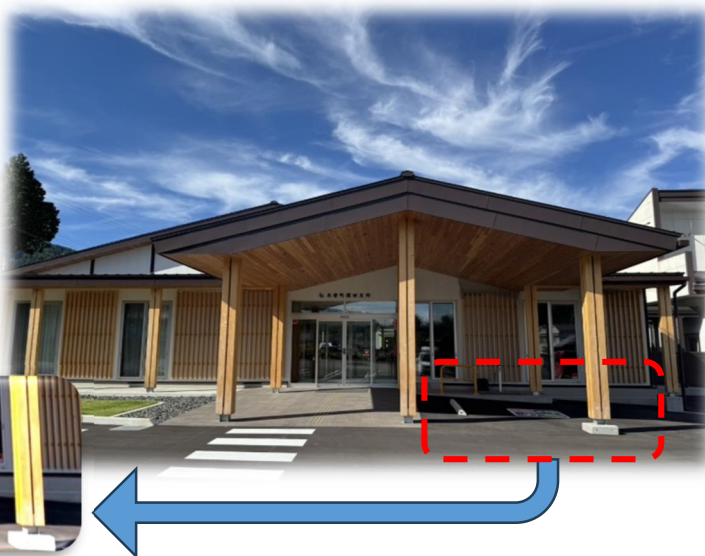
公共木造建築物の紹介

中部森林管理局管内において、新たに木造により建築された公共施設の中から、令和三年に開庁された長野県木曽町役場本庁舎と令和七年五月に開庁された木曽町開田支所をご紹介します。

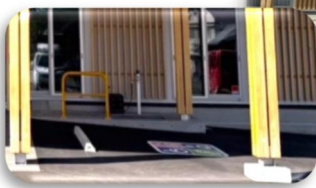
木曽町 開田支所

木造平屋建ての庁舎には、町有林から伐採したヒノキ材が多く使用されています。外観、内装ともに、落ち着いた色彩を基調としており、伝統的な建築様式である切妻の大屋根構造が採用されています。段差をなくすバリアフリー化や、屋根付き駐車場が設置されており、高齢者や車いすを利用される方も訪れやすくなっています。

また、庁舎には七十二時間の稼働が可能な非常用発電機を備えるなど、災害時には防災拠点施設として住民の安心・安全の確保が図られる施設となっています。



(写真右)開田支所の全景
(写真下)玄関前に屋根付きの
駐車場があり、段差をなくし
バリアフリー化している

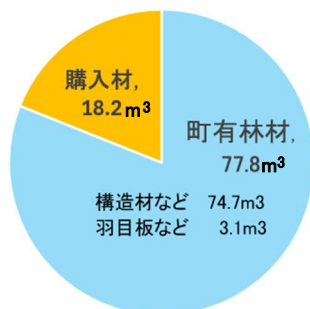


化粧板が落ちついた雰囲気を出している相談室



エントランスの先にある窓口の様子

◆使用した木材の内訳◆
全体数量 96m³ のうち、
8 割を超える 77.8m³ が
町有林から伐り出された
ヒノキ材などとなり、
主に建物を支える構造材
として利用されています。



支所内に設置された木曽町図書館開田分館

木曽町役場開田支所
〒397-0392 長野県木曽郡木曽町開田高原西野 623-1

木曽町役場本庁舎

庁舎全体に使用した木材八九七³m³のうち、約三七％の三三四³m³が柱や梁等の構造材用の無垢材として使用されています。特に、木曽地域特産の「木曽ヒノキ」と、木曽町内の民有林の三割を占め、今後の利用促進が期待される「カラマツ」をふんだんに使用し、梁が壁の外に出る木曽地域の伝統的な「出梁造り」の工法を用いた、全長一〇八mの長大な木造（一部鉄骨）鋼板平屋建てとなっています。



正面玄関を入ってすぐに広がる「待合の間」

さらに、この本庁舎には、地域資源を無駄なく利用できるよう木質チップバイオマスボイラー（冷暖房）を導入しており、伐採された丸太の全てを使用する、環境に配慮した、他に例のない先進的な建築物となっています。

【資源活用課】

※庁舎は令和四年度カナダ林産業審議会主催の「COFII木造建築デザインアワード」の大型木造部門に入賞しました。）



木曽町庁舎の全景 全長 108mの長大な平屋建て



来庁者が自由に利用できる多目的スペース「きそらボ」



裸足で歩くことができるヒノキの床材フロア「はぐくみひろば」

◆木材使用量◆

全体	896. 95m ³
構造材(柱・梁等(ヒノキ・カラマツ))	334. 13m ³
板材・その他羽柄材(サワラ板・構造用鋼板等)	562. 82m ³
うち町有林全体	185. 48m ³
うち町有林構造材	136. 96m ³
うち町有林板材	48. 52m ³
※町有林は、全体で20. 68%・構造材で40. 99%を使用	

木曽町役場本庁舎

〒397-8588 長野県木曽郡木曽町福島 2326-1

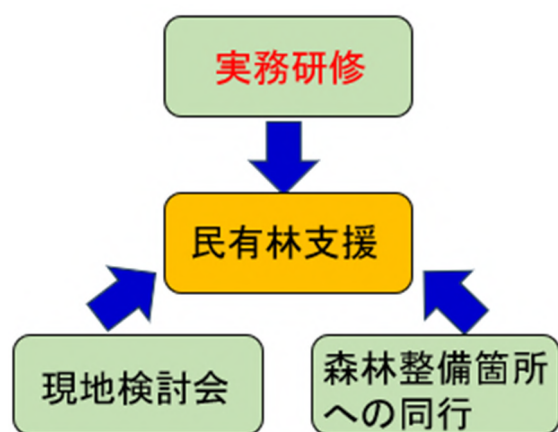


両脇に行政サービスの窓口が並ぶ「中山道こみち」

自治体の林務担当の皆さま お役に立てる研修を実施します

中部森林管理局では、職員の能力向上や人材育成を目的として、年間を通じて様々な研修を実施しています。

この中には、国有林による民有林支援に向けた取組の一つとして、市町村林務担当の皆さまの森林・林業に関する知識や技術力の向上にご活用いただけるようご案内している研修がありますので紹介します。



右図は民有林支援のための三つの柱
「実務研修」「現地検討会」
「森林整備箇所への同行」

Ⅰ 実務研修について

実務研修は、民有林支援に向けた取組の三つの柱の一つで、研修内容等は、下表に示すとおりです（令和七年度計画分）。

主に当局の若手職員を対象とした研修へご参加いただく形で、森林・林業の基礎知識や実務の習得を目的としています。研修期間は三日から五日間程度で、市町村職員の皆さまの業務のご都合に応じて、例えば、五日間のうち二日間を受講する形も可能です。

令和六年度は、「森林の見方（基礎研修）」など四つの研修に市町村等から五名の方が参加されました。市町村等では、林務担当者が少なくこのような研修は難しいと聞いています。せっかくの機会ですので、興味がありましたらご活用を検討ください。

今年度は既に終了しましたが、「森林の見方」「森林の育成」については、現地での集合研修だけでなくWEBによる研修も実施していますので、比較的受講しやすい研修

となっています。もちろん、現地研修へ参加いただければ実務の習得のお役に立てると思います。

来年度も実施予定となっておりますので、機会がありましたらぜひ、参加をご検討ください。

研修名	主な研修内容	研修方式
森林の見方 (基礎研修A)	・森林施業の基礎 ・現地での森林の見方 ・森林GIS等の活用 ・主な樹種、植生の見方 等	Web研修 及び 集合研修
森林の育成 (基礎研修B)	・造林事業 ・森林被害と森林保護 ・治山事業 等	Web研修 及び 集合研修
森林の収穫 (基礎研修C)	・伐採する森林の収穫調査実習 ・木材利用	集合研修
先進技術研修	・無人航空機基礎知識 ・基本操作 ・画像処理	集合研修
森林環境教育 実践者育成研修	・森林環境教育の企画立案 ・野外活動・自然観察等(現地実習) ・森林と幼児教育(現地実習)	集合研修
林木育種研修	・林木育種事業の概要 ・新品種の開発・エリートツリー ・試験地での調査実習 ・技術開発の取組	集合研修

Ⅱ 今年度の実務研修の一部を紹介 【先進技術研修】

八月二十六日から二十八日まで岐阜県下呂市加子母B&G海洋センター及び岐阜県森林管理署管内で行った先進技術研修には、岐阜県森林研究所及び木曽広域連合から二名参加いただき、合計十一名が受講しました。

研修では、最初に関係法令等の基礎知識や、無人航空機の基本操作を学習しました。翌日は、ひずみを補正したオルソ画像の作成方法や最新の画像処理技術の演習、ドーム施設や屋外での実践的な無人航空機の操作練習などを行いました。



無人航空機の基本操作を学ぶ様子



撮影した画像を現場で確認(カスタムカーが活躍！)

参加した岐阜県森林研究所及び木曽広域連合の職員からは、「これまで法律等を詳しく勉強する機会がなかったので、良い経験になった。」「実際に野外で飛行させる経験ができて良かった。」「無人航空機の操作だけでなく、自動飛行の操作方法について学べて良かった。」「撮影した画像の処理方法を学べて良かった。」等の感想が寄せられ、有意義な研修となりました。

【架線集材研修】

九月十六日から十九日まで木曽森林管理署及び南木曽支署管内において「架線集材研修」を実施しています。急峻な場所で伐採した木材

を、空中に張ったワイヤーロープに吊るして運び出す架線集材は、かつては多くの山で行われていました。しかし近年、架線を扱える技術者が極端に減少していることから、国有林で木材生産事業を請け負う事業体の協力を得て今年度新たに設けたものです。

研修は、地域が抱える共通の課題を、一体となって取り組んでいくため、長野県や近隣の町村などへ案内を行い、広く参加を呼びかけました。架線集材箇所の見学や伝統工芸工房の視察など、計画したカリキュラム五コマへの参加者を募集したところ、延べ六十五名の応募があり、関心の高さと、地域で抱えている課題の大きさをあらためて実感することになりました。

今後とも地域が抱える課題に対応できる研修を検討してまいります。



移動可能な集材機「タワーヤード」



集材線(赤の点線)と木材を吊る搬器

市町村等の林務担当職員の人数は限られており、日々の業務をこなしつつ研修に参加するのは、ハードルが高い面もあるかもしれません。しかし、研修に参加し職員と交流いただくことで、国有林職員にとっても、気づきや学びの視点を得られる貴重な機会になると考えています。今後とも実務研修を含む民有林支援の取組を紹介しますので、ご活用ください。

民有林支援に関する

コードはこちら→



市町村からの応募を受付中の研修
森林環境教育実践者育成研修

(集合研修 応募〆切九月三十日)

研修に関するご相談は中部森林
管理局研修所もしくは、総務課まで。

TEL 〇五〇三二六〇六五一四

【総務課】

シリーズ



現場最前線からの便り

国有林の現場の最前線となる森林事務所・治山事業所等の仕事や、管轄する地域の特色などを紹介します。

【富山森林管理署
とやま

砺波森林事務所
となみ

森林官 金 敏博
こん びん

砺波森林事務所は富山県西部に位置する南砺市に所在し、石川県白山市・岐阜県飛騨市及び白川村に隣接する国有林野約八、五〇〇haと官行造林地約二四五haを管理しています。

森林事務所では、森林のパトロールや境界の維持管理、森林整備事業の進捗状況確認、管内自治体との連絡調整、NPO団体等の森林ボランティアの支援、国有林野の貸付など幅広い業務を行っています。

これらの中から、現在行っている二つの業務について紹介します。一つ目は、森林整備における間伐作業です。

間伐とは、植栽木の成長に応じて樹木を伐採することにより、混み合った林内を整理する作業です。



事業実施者との打合せ(写真右筆者)

間伐を行うと太陽光が地表に届くようになり、幹や根が発達します。また、下層植生が増えることにより土壌を保全し、山地災害にも強くなります。さらに、樹木が健全に成長することで木材の価値も高まります。

間伐を行わずに放置すると、樹木はお互いの成長を阻害して形質不良になるため、間伐は大変重要な作業です。

このため、健全な森林の整備を目指して、事業実施者に対する監督・指導を行っています。

二つ目は、地元NPO団体等との森林ボランティアの調整です。

水無国^{みずなし}有林内には、ミズバショウ、リュウキンカ、バイケイソウ、カタクリ、ヤマトリカブト等が群生する湿原があり、ミズバショウは、六月中旬頃まで楽しむことができます。また、湿原の周囲には樹齢一〇〇年を超えるブナの天然林が広がっており、一帯が「水無湿性植物希少個体群保護林^{みずなししつせい}」に指定されています。

近年、イノシシやシカによる食害や踏み荒らし、エゾノギシギシなど外来種の侵入等により、ミズバショウやヤマトリカブト等の湿地性植物の減少が見られ、湿原の規模が縮小してきています。



食害防止用のワイヤーメッシュ敷設作業

湿原の貴重な植物を保護・管理するため、地元NPO団体との協働により、湿原内にワイヤーメッシュを敷設するなどの被害対策を実施しています。



ワイヤーメッシュ敷設後の状況

■未来の担い手へのメッセージ

森林事務所の仕事は、まさに森林整備・林業の現場最前線の仕事である一方、森林環境の保護・復元等にも取り組んでおり、日々、貴重な経験ができる職場であると実感しています。こうした仕事に興味のある方は、ぜひ一緒に山の仕事に取り組んでみませんか。

シリーズ

私の森語り
もりかた

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。



「信州の豊かな自然を描く」



透明水彩画家
しみず めぐみ
清水 恵

■自己紹介

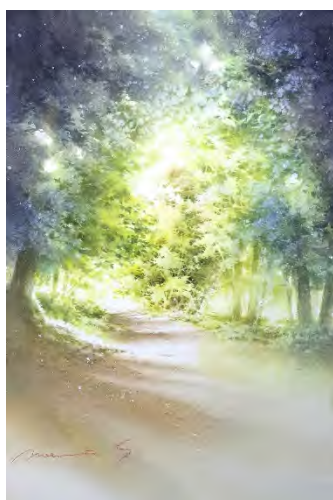
長野県伊那市出身。水彩画講師。日本透明水彩会会員。東京や長野などで年数回、個展やグループ展を開催。社会人になってから水彩画の魅力に取りつかれ、独学で描き続けている。

■活動内容

透明水彩絵具を使い、主に風景を描いています。

当初は「小学生が使う手軽な画材」といった印象でしたが、水彩画は描けば描くほど奥深く、油絵のように重厚にも、水墨画のように繊細な作品にもなる、非常に自由度の高い画材だと気づきました。以来、さまざまな技法書などを参考として、自分なりに日々研究を重ねています。

水彩絵具には大きく分けると「透明水彩」と「不透明水彩」の2つがあり、両者の違いを端的に言えば「下に塗った色が透けるか、透けないか」です。透明水彩は下の色が透けるため、基本的に修正はできず、思うように描けなかった時は最初から描き直すことになります。不透明水彩は下の色が透けないので、修正が容易で、しつかり色を塗り込み重厚な作品を描くことができます。



きらきらと輝く木漏れ日

では不透明水彩の方が良いのでは？と思われるかもしれませんが、透明水彩の最大の魅力は何といってもその透明感です。優しく舞う桜、きらきらと輝く木漏れ日、冷たくも暖かい銀世界。私が描きたい世界には、透明

水彩の透明感が欠かせません。

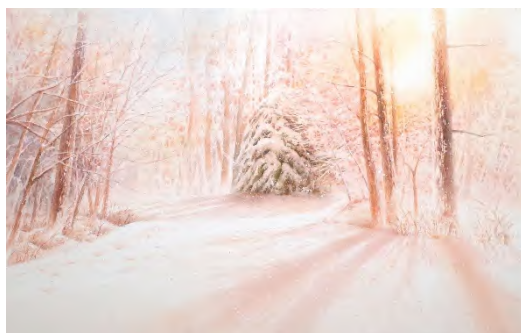
私は幼い頃から信州の豊かな自然に育まれてきました。緑豊かな森林、滔々と流れ落ちる滝、翡翠色に煌めく溪谷、朝日に輝く銀世界。当然のように目にしていたそれらの風景は、環境の変化とともにその姿を変えつつあります。今ある美しい景色は、三十年後、いや十年後には無くなっているかもしれない。森林は伐採され、川は枯れ、雪はもはや絵本の中にしか存在していないかもしれない。今この時代に奇跡的に出会えたこの世界の美しさ、その力強さを、自分が感じたままに自分の色で描き残していきたい。そう願い、今日も絵を描いています。



彩り豊かな秋の溪流

■メッセージ

絵を通じて、自然の美しさ、強さ、そして厳しさなどを描き続けていきます。今後はより活動範囲を拡げ、長野県の自然を全国へ伝えていきたいと思っています。



冷たくも暖かい銀世界

今後の展示予定

二〇二五年十二月 ギャラリー銀座

(東京・個展)

二〇二六年四月 丸善丸の内本店

(東京・グループ展)

二〇二六年六月 かんてんばホール

(長野・清水恵水彩教室展)

■連絡先

WEBサイトの

コードはこちら↓



Instagramの
↑ コードはこちら

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第 50 回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「神宮備林」その二



昭和 8 年頃、第一備林の一つ「賤母」の遠望

明治時代末頃から指定が進んだ「神宮備林」でしたが、大正時代では将来のヒノキ大樹を保護育成するために他の森林と区別したことが主で、本格的な森林の整備方針が定まったのは昭和に入ってからのこととなりました（実は昭和初期というのは帝室林野局にとつて、農林省山林局の国有林と比較しての存在意義が問われていた時期でもあり、宮内省の組織として神宮関連の事業に力を入れ出す背景がありました）。

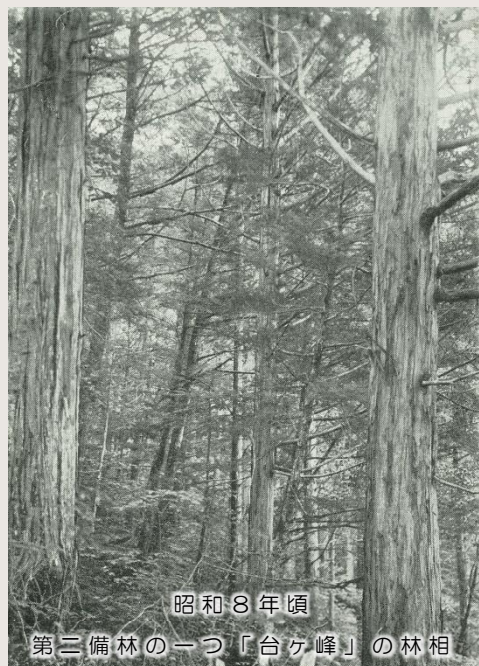
大正時代からヒノキ以外の樹種を抜き伐りする受光伐程度は行われていたのですが、「ヒノキを伐らないだけで今後の神宮用材の確保に十分な成長が見込めるのか」という懸念が出るようになり、将来を見据えた森林整備を検討するために、昭和六年から「神宮備林」の根本的な資源量調査が行われました。胸高直径六十 cm 以上の大樹の毎木調査、ヒノキの天然更新状況の調査、環境調査などが行われ、残されている資料からはかなりの人員を割いて調査に当たったことが伺えます。この調査を経て、昭和八年に「神宮備林」は三つの種別地域に区分されることとなりました。

「第一備林」はヒノキ大樹に富み、過去にヒノキ林が更新したことが確実な場所が選ばれ、神宮御用材を将来的にも生産し続ける場所とされました。具体的には「出小路」「男捶」「賤母」「妻籠」「三殿向」「南木曾」「薬師澤」「荻原西山」となりました（各「神宮備林」の具体的な位置については前号第四十九回参照）。

「第二備林」は「第一備林」が十分に育つまでの間に、ヒノキ大樹を補給したり、臨時の神宮御造営などの予定外の状況に対応する予備林とされました。こちらは「北澤」「天王洞」「臺ヶ峰」があてられました。「第三備林」には「中立」「瀬戸川」があてられました。ここは大樹は少ないながらも分布するヒノキが通直であるため、昭和八年以前は将来にわたって御用材を生産すべき「永久備林」とされていましたが、「第三備林」として中径木の不足を補う予備林かつ、



昭和八年頃の第二備林「男捶」のヒノキ。胸高直径が九十 cm 以上あり、良大木の代表例とされた。



昭和 8 年頃
第二備林の一つ「台ヶ峰」の林相

木曾のヒノキ林としては比較的平坦な個所として「御杣始祭^{みそまはじめさい}」の厳粛な祭典が開催しやすい場所としても想定されました。「中立」は現在の小川入国有林の一部であり、結果的には昭和十六年以降の五回の「御杣始祭」がいずれもこの場所で開催されたこと、歩きやすく国民に親しみやすい場所として小川入国有林の一部が後に赤沢自然休養林となったことは興味深いところです。

恒久的なヒノキ大樹林の運営と二十年毎に必要な大材の生産を目指した林業というのは前例の無いことであり、当時の知見を駆使して検討がなされました。概要としては「神宮備林」内のヒノキ林を林齢・面積のバランスがとれた「法正状態^{ほうせいじょうたい}」へと調整し、将来も維持するというものでした。



昭和 16 年 10 月撮影
三重県桑名貯木場に到着した神宮御用材

「神宮備林」においては神宮御用材以外の伐採作業は「整伐^{せいばつ}」、造林作業は「撫育^{ぶいく}」と呼ばれました。この「整伐」と「撫育」のルールが詳しく定められ、昭和十年代中盤までは順調に作業が進められたようです。当時の帝室林野局の関連資料には「神宮備林」における詳しい施業記録が残されていますが、これは計画が進んだ何十年後、百年後という将来にも役立てることが意識されていたのでしょうか。しかし、第二次世界大戦の影響で昭和十七年頃から作業は著しく遅れだし、戦争末期には人手不足などで一貫した作業が行えなくなったようです。



昭和 8 年頃
第三備林の一つ「瀬戸川」の林相

伊勢神宮は基本的に古来の建て方のまま不変であるため、必要な用材の寸法・本数もほぼ変わらないはずであり、計画通りに進めば恒久的なヒノキ大樹林が運営出来るはずでした。しかし計画からわずか十数年の間に戦争への突入、戦中戦後の混乱、神宮備林制度自体の廃止と、次々と想定していなかった事態が発生します。戦後の旧神宮備林は国有林としての役割が求められるように、伊勢湾台風などの大規模な災害、国有林野事業の赤字化など、時代ごとに様々な出来事にも直面してきました。この歴史的事例には超長期的な森林管理というものの難しさを感じるところです。

「ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。
これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！
むかしの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、下記コードを読み込んでください。」



石灰岩地質に自生する天然カラマツ群落

しらいわだけ

白岩岳カラマツ等希少個体群保護林

設定目的

天然カラマツが群落を形成している学術上価値の高い林分であることから、この群落を保護することを目的としています。

地況・林況

当該保護林は、カラマツを主体とし、シラビソ、コメツガ、カンバ等の混交する天然林となっています。

また、石灰岩が露出している特異な地質・地形で形成されている地域となっています。

所在地
長野県伊那市



国有林野には、世界自然遺産を始めとする原生的な森林生態系を有する森林や、希少な野生生物の生育・生息の場となっている森林が多く残されています。

国有林野事業では、1915年(大正4年)以降、こうした貴重な森林を「保護林」として設定し、森林や野生生物等の状況変化に関する定期的なモニタリング調査を実施して、森林の厳格な保護・管理を行っています。



お問い合わせ先：計画保全部計画課 ダイアルイン：026-236-2612

※詳細は、コードを読み込んでください。

木づかい運動で ウッド・チェンジ!

日本の森林の約四割は人が木を植えて育てた人工林です。戦後に植えられた多くの人工林は、本格的な利用期を迎えています。その利用は十分に進んでいません。

木材を使うことは、「伐って、使って、植えて、育てる」というサイクルの一部であり、木材を使って森を育てるのは大切なことです。

ウッド・チェンジとは、身の回りのものを木に変える、木を暮らしに取り入れるなど、木の利用を通じて持続可能な社会へチェンジする行動を指します。

生活の中に木を取り入れる際の参考として、昨年ウッドデザイン賞を受賞し、管内四県(富山・長野・岐阜・愛知)の企業等が関わっている作品から何点かご紹介します。

「ウッドデザイン賞」は木の良さと価値を再発見できる製品や取組について特に優れたものを消費者目線で評価し、表彰する顕彰制度です。もしかすると、お住いの近くの会社が製作しているのかもしれない。

ウッドデザイン賞の

詳細はこちら ↓



東濃檜 薄型頑丈ラック
株式会社アオキウッド ほか
(岐阜県下呂市)
岐阜県の東濃檜を贅沢に使用、現代の住宅事情に配慮した奥行15cmの薄型シンプル設計



COM-PLATES 深皿タイプ
有限会社 高信金型製作所
(愛知県名古屋市中)
2023 年に受賞した作品の進化形、「コンパクト収納」と「レイアウトを楽しむ」をコンセプトに設計。
驚くほど薄く、軽いプレート

"SU"tools

株式会社アーティストリー(愛知県春日井市)
木未来研究所キノマチラボ(愛知県)
株式会社もりまち(愛知県岡崎市)
丸太の素"SU"の姿に最小限のデザインを加えたスツール。小径で利用機会の少ない丸太を利用し、2脚で対になる作りは、遊び心だけでなく木材利用の観点からも合理的



クロベのキセキ

株式会社かんでんエルファーム
(富山県南砺市)
黒部ダムに流れ着いた木が匠の技でインテリア雑貨として生まれ変わった環境にやさしい商品

Heera

ALPE(長野県)
建築端材を利用し、角材を束ねて幾何学模様をイメージしたユニークな家具。端材をより価値のあるものに生まれ変わらせている



楽しい林業教室「FOREST BALANCE GAME」から「林業甲子園」開催まで

飛騨五木株式会社(岐阜県高山市)
環境と経済のバランスの上に成り立つ森林や林業の世界を、子どもから大人まで幅広い年齢層が楽しく学べるボードゲーム。林業を取り巻くリアルな情報を元にデザインされており、クオリティが高い。



木曽ひのきを感じる、常しえの傘

株式会社 勝野木材(長野県南木曽町)
名古屋木材株式会社(愛知県) ほか
樹齢 80 年の木曽ひのきを中棒に採用し、長期間使用できるよう設計。使い捨て傘の環境問題に対する解決策として提示された、愛着を持って使い続けたい傘



ベビーバス キオケ・スイ

檜 創建 株式会社(岐阜県中津川市)
地域材の檜を使用し、地域に残る木工技術を併せ、過度な装飾をせず、木の表情そのものを活かした製品。ベビーバスとしてだけでなく、子供の水遊び用や、足湯などにも



フォトコンテスト 2025 開催中！ご応募お待ちしております

中部の森林 フォトコンテスト2025

～山と人の暮らしの再発見！～

テーマ (1) 山の仕事にスポットライト

〈事例〉

- 働く林業労働者の姿
- 国土を守る森林土木事業
- 山仕事の合間のお弁当
- 林業を学ぶ学生たち
- 木を使った伝統工芸

など

『林業 楽しい！』

『若い力でご神木を ヨイショ!ヨイショ!』

テーマ (2) 人の心を惹きつける山の表情

〈事例〉

- 季節の風物詩 (「雪形」、地域に縁が深い「桜」等)
- 日本美しの森～おすすめ 国有林～の一角
- 古木・老木・森の変な木
- 森の動物たち

など

『立山連峰とみくりが池』

『森のとろろ昆布』

デジカメ・スマホ・ドローン
撮影方法はなんでもOK!

富山・長野・岐阜・愛知
県内で撮影された写真限定

令和5年以降に撮影した
未発表の写真限定

応募は1人3点(組)まで
組写真(5枚まで)も応募可能

応募はこちらから

応募締切
令和7年12月12日

撮影は安全第一で

主催: 中部森林管理局

共催: 長野県森林整備協会、名古屋造林業材生産事業協会、(一社)長野県林業土木協会、(一社)名古屋県林業土木協会、
国有林観光施設協議会、(一財)日本森林林業振興会長野支部、(一財)日本森林林業振興会名古屋支部

コンテストの詳細はこちら

「森のとろろ昆布」の正体は「サルオガセ」
標高が高く、霧の多い場所で見られます。
植物ではなく、「地衣類」とされています。



中部の森林 フォトコンテスト
では、「山の仕事にスポットライト」
「人の心を惹きつける山の表情」を
テーマとして皆さまからのご応募
をお待ちしています。

お出かけの際に見つけたお気に
入りの風景や人、動物などの写真を
ふるってご応募下さい。

※応募締切は十二月十二日(金)

お気に入りの写真
お待ちしております

各地からの便りは、ホームページへ詳細を
掲載しておりますのでどうぞご覧ください。

各地からの便り

広報「中部の森林」253号
発行: 林野庁中部森林管理局
編集: 総務企画部 総務課 広報

〒380-5875 長野県長野市栗田 715-5
電話: 026-236-2531
<https://www.rinya.maff.go.jp/chubu>



メールマガジンへ登録いただくと、広報「中部の森林」
の発行日に URL を配信します。
(奇数月の発行を予定)
メールマガジンの登録サイト
<https://mailmag.maff.go.jp/m/entry> において
配信を希望メールマガジンの中から
中部森林管理局広報「中部の森林」を選択して下さい。